

六 花

2011 平成23年
俳句雑誌りつか

9月号

Cover designed by Little Bird

祝「鳴の子」創刊・柴田多鶴子さん

鳩の子に湖^{うみ}広びろとありにけり

こ 黄金虫耳たぶに來て継りけり

ゆ 爪先に痺れを少し夜の秋

び 鏝錢に日の当たりたる石^{いわ}清水

き 肝吸の苦みほどよき晩夏かな

ら 辣蕪の漬かり浅かり洗飯

せ 背のびせし蚊帳に片脚はみ出しぬ

て 掌に星現るる秋灯下

ま 松脂の梁に湧きゐる避暑の宿

だ 抱き起こし赤子の汗を嗅ぎにけり

ま 松虫を聞き分けてゐる夜更かな

も 藻の吐ける西日の中の泡一つ

新茶汲む老いてこそなる味のあり 貝森光洋

しんちやくむおいてこそなるあじのあり かいもり こうよう

鮮やかに更衣せし妻の貌

萍と空行く雲と山頭火

素っ裸たましいだけはのこりみて

素っ裸脊椎動物骨遺る

新茶を汲んだら、今まで気づかなかった良い香りがした。はて初めて飲む種類の茶だろうかといぶかしんで改めてみるが今までと同じ銘柄のお茶であった香りだ。若い時には気づかなかった実に深い味わいがする。年齢を重ねる事によって感覚が鈍ってくることも否めないが、その一方で老いてこそ判る味わいがあるのだよというのが上手い。掲句を味わっていると老いてゆくのもいいものだと思わせる説得力がある。決して派手ではなく、むしろ目立たないしみじみとした作品ゆえに自然体で俳句を詠むことの大切さを教えてくれる。

つちふるや水平線の白く照り

志方章子

つちふるやすいへいせんのしろくてり　しかたあきこ

熟るるまで一日置かむさくらんぼ

梅雨晴間海は濁りを解きをらず

時として影の消えをり梅雨晴間

オリーブの花に眼下の波の音

「つちふる」とは黄砂のこと、黄砂でぼやけた海の方向の視界が利かない。そのぼやけた景色の遠くに白く明るく見える線がある。水平線だ。白く見える水平線は太陽に光ってやや円みを帯びている。普段から何気なく海の向こうを眺めていたが、普段よりも一層強く水平線を意識して感動したという写生句。私もこのような大景を詠みたいと思っているが、意識して大きな景色を眺めてもなかなか捉えがたい。しかし章子さんにはそのチャンスが訪れた。写真で言えばシャッターチャンスである。そこを逃さず、捉えた俳句のレンズが冴えている。

手を深く差し入れて剪る濃紫陽花 平居滯子

てをふかくさしいれてきることあじさい ひらしみおこ

丹の橋を二つ埋めてつつじ咲く

海底を彷徨ふごとく梅雨に入る

海沿ひに青き列車や梅雨に入る

稜線のあらたまりぬる梅雨晴間

まさにその通りである。紫陽花を切りとるときには、確かに紫陽花の穂の間に手を深く差し入れて手探りの状態で剪りるのである。今までに誰しもが経験している何気ない行為を平居さんが採り上げて作品とした。そこに誰も気づかなかった発見と意外性があり俳句としての輝きを得た。いかに日常の中にと今まで詠まねなかった題材が潜んでいるかと言うことを証明して見せたのである。俳句は何も文字にこだわったり、特殊な環境を探したりしなくてもよい。いわゆる見えて見えない物でも日常とじっくり取り組んでいけば、俳句が向こうからやってくる。授かるというのはこういう事を言うのである。同時作「海底を彷徨うごとく梅雨に入る」も優れている作品。

ごきぶりの一瞬に死を悟りけり

田尻勝子

ごきぶりのいつしゅんにしをさとりけり たじりかつこ

螢匂ふ闇へ裏戸を走り出る

冥土には謝りにゆく曼珠沙華

かき氷忘れるために食ひにけり

梅雨茸に虫の食み痕ありにけり

打たれる一瞬をゴキブリの側に立つて詠んだ。ごきぶりは何時もすばしこい。見つけた人間は身近にある、ありとあらゆる武器になりそうな物（どんな物かは読者の想像にゆだねる）を掴んで打ち殺そうとする。が、生命力が強く人類が絶滅しても生存し続けるだろうと言われ、ヒトはしばしば反撃を喰らう。ゴキブリが地球上に出現したのは約三億年前石炭期であり、『生きた化石』とも言われている。人間よりゴキブリの方が一枚上手で、打たれる寸前にすばやく消える。だがこのゴキブリは「今回は逃げ切れない」と瞬時に観念して死を悟った。打った方の人間はゴキブリに当たる前に手応えを感じたのであろう。その勝負の間合いが想像されて面白い。

ひまはり

梶浦玲良子

西日刺すどうゆく変形歩道橋
空蟬の真下フリーマーケツト
麦秋の荒野を帰るきつね雨
胃薬の能書ひまはりうなだるる
先頭のでんでんむしが立ち止まる

麦わら帽子

笹村 政子

ひらめきのごとくに消えし青蜥蜴
緑蔭や人もましち猿も同じ目を
園丁の麦わら帽子浮かせをり
夏霧にはハーブの匂ひしてゐたる
飽きられてよりでで虫の角伸ばす

せつじゆしゆう
雪樹集

蛭

飛びながら点滅しゆく蛭かな
葉の闇に止まりて光る蛭かな
幼の目蛭さがしてをりにけり
いつの間に我一人なり蛭橋
瞬きてひとつになれる蛭かな

蟻

巢作り

筒井八重子

青空に葉をそへ凜と浮かぶ花
散り初むるライラックの空雲流る
蚕豆の花満開にそよぎをり
待ちわびし満開桜愛でてをり
白鷺の巢作りゐたる天気良し

蜂

六花集

蝉死死蝉ゆ
のぬぬのき
声るまあ
負までい
けはき
じ女女つ
と捨真つ
子て夏昼
犬吠の紅
えよ秋を
に秋のさ
けのさ
り空す中し

村上
はな
な

秋縁蚩鷺明
の台狩草日
の影の飛には
海路絵び燃
浜地にの立え
風生ごた尽
匂まとむきる
ふるくすべ
母るく岸し
子秋動か
のの動か
像風きな夜

五ヶ瀬川流一

母雨節夏猛
の上々に嵐暑
日がにトかな
やり雌ン水
花急花の打
一本でみの中
で庭なるで湯
詣の草瓜帽子
で草のの飛
け雀のの立
りる花ぶち

北村ちえ子